

よろずは

平成二十六年
八月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

不尽の嶺に 降り置く雪は
六月の 十五日に消ゆれば
その夜降りけり

万葉集 卷三―三二〇 高橋虫麻呂

【意訳】

富士山に降り積もる雪は、夏も末の六月一五日に
やっと消えたと思うと、また夜には降ることだった。

富士山は、「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」の名で二〇一三年に世界文化遺産に登録されました。『万葉集』にも十首以上の歌が残されており、小倉百人一首にも採られた、山部赤人の歌はことに有名かと思えます。

今回ご紹介する歌は、その歌より少し後の時期に詠まれたとみられる、高橋虫麻呂の「不尽山を詠める」長歌に付された第一反歌です。この歌には、富士山に降り積もる雪は、夏の終わりの旧暦六月十五日によく消えるかと思ふと、その日の夜にまた降ることだ、とあります。どんなに暑い夏でも山頂に雪をかぶった、不思議な山だと言われていたようです。長歌では、富士山を日本列島の守護神のような山としてたえ、さらにこの反歌で、その神秘性を表現したとみられます。続く第二反歌でも、高く畏れ多いので、天の雲もはばかってたなびく、と詠まれています。

『万葉集』では、現在の「富士山」ではなく、「不盡山」と書かれます。なんだか別の山のようなですね。

【万葉古代学係】